2021年度学内研究助成 成果報告書

① 報告者所属・氏名

生活文化学科　長崎　勤

② 事業名

自閉症スペクトラム障害児における社会性・情動発達のアセスメント方法と発達支援プログラムの開発

③ 事業の目的

ASD を対象に、社会的ゲームや劇遊び、カフェごっこなどの身体的動作を伴った日常的な活動に埋め込まれている、ルール・役割理解、情動表出や情動調整などの要素を分析し、アセスメントする方法を開発する。また実際にアセスメントを行い、その結果をもとに「社会性・情動発達支援プログラム」を開発する。

④ 事業実績・研究成果（具体的に）

＜ゲーム・劇・カフェごっこなどの活動における社会性・情動発達支援＞

（1）椅子取りゲーム：

5 歳の自閉スペクトラム症（ASD）A 児を対象に、椅子取りゲームを通して、勝ち負けのルールを共有し、勝って嬉しいというポジティブ、負けてくやしいというネガティブの自己の情動表出や他者の情動理解、また、勝った・負けた際の、自分の中での自己調整、他者と関わることでの相互調整、また行動、言語、メタ認知方略の情動調整のレパートリーの獲得を支援し、他者意図理解を促すことを目的とした。

A 児は、初期には、負けるとお茶を飲みに行く行動方略、中期には負けた際に、「ダメ」等の言語方略、後期では悔しくて泣き、「くや（しい)」等の言語方略、「もう一回」等のメタ認知 方略での自己調整が増えた。後期には、負けると母親に抱きつき泣く行動方略、ピアに「じゃんけんしようよ」等の言語方略・メタ認知方略での相互調整が見られた。中-後期に、大げさに床に座り込む負けたピアへの注目を促したところ、後期には自発的に負けたピアの頭を撫でた。家庭や他の指導場面では、限定場面における親しい他者への欲求意図への関心から日常での自己感覚、限定場面で、ゲームで負けた父に「くやしい？」と尋ねるなど、他者欲求・感覚、日常での自己感情へと変化した。

以上から自己→相互調整、行動→言語→メタ認知方略の発達プロセスで、悔しい 等の感情の表現と他者との共有が可能になることが確認され、負けた他者への注目の重要性が示唆された。

（2）劇遊び：

5 歳の自閉スペクトラム症（ASD）A 児を対象に、劇「大きなかぶ」を用いたコミュニケーション・社会性の支援を行った。

①A 児の物語理解：登場人物の登場の順番という、基本的な物語の時系列的な理解、「一緒に引っ張る」という身体的な同期による物語のゴールについての身体的理解からはじまった。そして、「引っ張ることは抜くことではない」ことの理解や、自分の行った役割についての行為を「抜きました」と言語による説明が可能になり、「人を引っ張って→(一緒に)か

ぶを抜く」ことの行為の協同性の理解、そして物語の結末の理解を通して、物語の因果的な理解を深めていったといえる。②自己理解:A 児は自分の役割を理解し、また、劇中、父親に向かって「パパー！今、やってるう」、劇が終わると「A ちゃん戻った」という発話から、劇中は役を演じているという理解ができるようになったといえる。ホルツマン(2014)は、演じるということは、自分自身であるという永続的な部分と、登場人物であるという一時的に変化している部分で成り立っていると述べており、A 児において、自己が育ちつつあるといえる。③情動表出・調整: 役割選択の際に、丁寧な言語を用いて、交渉による情動の相互調整が可能になってきたといえる。プリザントら(2010)は、ASD 児における相互調整、またその際の言語方略･メタ認知方略の困難性を指摘している。A 児においては、上記のように、劇の役割や役割の選択の場面を設定することで、徐々に、相互調整や言語方略が可能になって来たといえる。④他者意図理解 : 指導の限定場面や母親への他者感覚の理解が見られたことから、「心の理解」における他者の信念理解の発達の萌芽が見られるようになったといえる。

（3）カフェごっこ:

5 歳の自閉スペクトラム症（ASD）A 児を対象にカルピス®づくりを通したコミュニケーション・社会性の支援を行った。

A 児は「カルピス」づくりの支援を通して、自分の欲求を他者に伝えるだけではなく、他者には独自の選択欲求意図があることを学んでいったといえる。また他者の味覚感覚を言語で尋ねるようになり、他者の感覚や感情への関心を示し始めた。他の指導場面や家庭でも自分の欲求意図、自分の情動の表出・情動調整が出来るようなったが、他者の欲求、他者の心的状態の言及には、促しが必要な状態である。このような傾向は、ASD 児では自己の欲求・信念理解に比べ、他者の欲求・信念理解が困難性という野澤（2016）らの指摘に類似した結果であるが、親密な母親らへの他者の欲求・信念理解が見られはじめていること、大人の促しによる他者の欲求・信念理解もみられ、「心の理解」における他者の信念理解の発達の萌芽が見られるようになったといえる。自己・他者意図理解の促しを、家庭や他の指導場面の多様な場面で越境的（田島,2015）に行うことによって、ASD 児においても「心の理解」の学習可能性が示された。

⑤ 研究成果の発表・活用（学会発表・論文掲載・地域連携・産学連携など）

＜図書＞

●長崎　勤・吉井勘人・長澤真史(編著)・日本発達心理学会「発達障害」分科会（監修）(2022)これからの特別支援教育－発達支援とインクルーシブ社会実現のために－　北樹出版

●長崎 勤・田島信元・吉井勘人（編著）(2022)食育を通したコミュニケーション発達支援－「カルピス」づくりによる支援プログラム－福村出版(印刷中)

＜学会発表＞

●海老沢萌里・長田彩里・吉井勘人・板倉達哉・長崎 勤(2022)自閉症児への包括的発達支援プログラムの開発（1）－「イス取りゲーム」を通した情動表出・調整の支援－日本発達心理学会第 33 回大会論文発表集 6PM1-G-PS16.

●Nagasaki,T.(2021). Development of construction of shared context in symbolic play of child and parent..Poster Session. #2575.The 32st International Congress of Psychology, July 20,2021,Prague,Chez.

＜シンポジウム＞

●吉井勘人・青木雄一・長崎 勤・海老沢萌里・長田彩里・佐竹真次(2021) ＡＳＤ・知的障害児に対して「非認知能力」（社会情動的コンピテンス）をどう育むか　日本特殊教育学会第 59 会回大会論文集,自主シンポジウム.

⑥ 今後の展開・継続性について

引き続き、自閉症スペクトラム障害児における社会性・情動発達のアセスメント方法と発達支援プログラムの開発をすすめる。